

『後撰集新抄』翻刻(三)

日向一雅

A Transcription of *Gosenshū Shinshō* (III)

Gosenshū Shinshō, published in 1814, is a representative commentary on the *Gosen Waka Shū*. It was once reprinted between 1910 and 1912 by the Kasho Kankōkai but has since become a rare book. According to the General Bibliographical Index there are only ten complete sets in existence. Although unlisted in the Index, the library at Seishin Joshi Daigaku is in possession of all 15 volumes of the set. In vols. 64, 66 and 67 of *Seishin Studies* I presented a transcript of the "Bekki" volume and volumes I, II, and III. For this issue I have transcribed volume IV.

後撰集新抄夏 四 (外題)

後撰和歌集卷第四新抄

夏歌

題しらず

よみ人しらず

一四 けふよりは夏の衣になりぬれどきる人さへはかはらざりけり

○夏になりて、春の服を更へ改めつれど、着る人まではかはらざるよとなり。統古今維上、源ノ「けふ見れば

夏の衣になりぬれどきはかはらぬ身をいかにせん、とあるなどをも、引合せて心得べし。四、句のさへ

は、俗言にまでといふに近し。拾遺春雜「あたらしき年にはあれども鶯の鳴音さへにはかはらざりけり、な

どの類なり。さて、更衣の日は、衣服のみならず、几帳の帷カマドなどまでもかふる事にて、葵卷四葉に、西

の対にわたり給へり。衣かへの御しつらひくもりなく、あざや二かに見えて云々、但此葵卷なるは、十月の更な

どあるが如く、うつりかはりたるさま、末ことにきはくと目にもたつ事なれば、「着る人さへは云々と、

思ひよせらるゝなるべし。此所をよく心して見るべきなり。今世の下さまのものゝさまなどに思ひくらべて見ては、かゝる深き

とのついでにおどるかしくなり。すべていにしへの歌を見るに
は、其時その所のありさまを、よく思ひわたして心うべきなり。

一四

卯花にはふさかりの伊勢集のさけるかきねかきねの月清みいねみいねずきけとやなく霍公鳥

○六帖さつきの家持集に「月をだにあかず思ひてねぬものを時鳥さへ鳴わたるかな、とあるなどに似たる趣意なり。

う月ばかり、友だちのすみ侍ける所近く侍て、かならずせうそこつかはしてんと侍けるに、おとなく侍ければ(二ツ)

※つかね緒云、卯月ばかり友だちの近き所に仕侍て、かならずせうそこつかはしてんと侍けるに、おとなく侍ければ。

○此詞書、いひざまゝぎらはしければ、上の如く改めて見るべく、又、おとなくなり侍ければとある本はわろきよし、つかね緒に見えたり。

一四

郭公きぬきゐるかきねはちかながらまちどほにのみ声の聞えぬ

○友達を時鳥になぞらへて、必かな消息せんといひたるが、音づれの無きを、待遠まちとほに云々といへるなり。近ちかながらと、待遠とを対へてふしとせるなり。此歌の三句、ちりながらとある本もあれど、それは誤なる事は、さらにいふまでもあらず。下冬しもふゆにも、「関せきこゆる道みちとはなしに近ちかながら年にさはりて春をまつかな、ともあり。

かへし

一五

杜鵑つばきこゑまつほどは遠からで忍しのびなくをきかぬなるらん(二オ)

○此方こなたにては、そなたを恋しく思ひて、常々つねしのび音ねになくをば、ほど近き所に居ながら、聞給きこはぬならんとなり。さて郭公は、もはら五月になけば、こゝは四月の事なれば、まだしき比ひの意にて、忍しのびなくと

いへるにもあるべし。

物いひかはし侍ける人の、つれなく侍ければ、其家のかきねのうの花をよりて、いひ入れて侍ける

○此詞書、一本に、物いひつつかはしとあるは誤なり。さて、此よみ人、かのつれなき人の家の前をわたるとて、其家の門のあたりに咲てある卯花を折て、此歌をつけていひ入れたるなり。前わたる事は、詞書に見えざるやうなれども、「其いへの垣ねのといふより末にて、しか聞ゆるなり。(三〇)

一五

うらめしき君が垣ねの卯花はうしと見つゝもなほたのむかな

○つれなきゆゑにうらめしとなり。かやうにつれなく恨めしき君が垣ねに咲たる花の名も、うの花といへば、憂しとは見つゝ、やはりたのむ事かなとなり。

返し

一五

うきものと思ひしりなばうの花のさける垣ねもたづねざらましなん異

○うしと見つゝもなほたのむといふにこたへて、マコト真実マコトにうき物と思ひしり給はゞ、尋もし給はざらめど、我につらき心はなきゆゑに、真実マコトにうしとも思はずして、猶たのみも、かく尋もし給ふなるべしといふなるべし。又、一本に、たづねざらなんとある方にては、さほどにうしと思ひ給はゞ、尋給ふ事なかれと云意なり。此方も然るべし。(三〇)

うの花のかきねある家にて

一五 時わかずふれる雪かと思ふまでに垣ねもたわにさけるうの花

○垣ねもたわには、垣ねもたわむほどにといふ意なり。古今秋「をりて見ばおちぞしぬべき秋萩の枝もたわにおける白露」といへる、たわに同じ。

友だちの、とぶらひまでこぬ事を、うらみ遣はずとて

一五 白たへにほふ垣ねのうの花のうくも来てとふ人のなきかな

○上ノ句は、うくもといはん料の序なり。されど、こは垣に咲たる卯花を見つゝ居るまゝに、いとどとひ来ぬ人の頬に憂^ウらめしきにつきていひやりたるなるべし。さるは、卯花の色の、衣の色に似たるゆゑなり。たゞに来る訪ふとばかりいはずして、来て訪ふと云へるわたり、深^ミく待思ふ意あり。下ノ句の聲^{ハジメ}に、憂^ウくもといへる、憂の言力ある歌なりと、麿麻呂はいへり。

題しらず

○一本に、かくあるぞよろしき。

一五 時わかず月か雪かと思ふまでにかきねのまゝにさけるうのはな

○時わかずは、四季をわかつたすの意なり。此詞は、雪かと思ふといふ方にかゝるなり。垣ねのまゝには、垣のあるかぎり咲つゞける意なり。俗言にいはず、垣根^{ドク}通り一面^{イッサン}にといはんが如し。

一五 なきわびぬいづちかゆかんほとゝぎす猶卯花のかげははなれじ

○時鳥の昼夜鳴く如くに、我も泣あぐみたり。今は何所へかゆくべき。いや、時鳥の、ゆくさきもく、憂しといふ名の卯花の咲てある如く(四)に、我も何所へ行たりとも、憂き世の中をば、え離れじとなり。古今夏「五月雨に物思ひをれば杜鵑夜ふかく鳴ていづち行らん、「ほととぎすわれとはなしに卯花のうき世の中に鳴渡るらん、後拾遺夏「我宿の垣ねな過そ時鳥いづれのさとも同じうの花、など引合せて心得べし。

卯月ばかり、月おもしろかりける夜、人に遣しける

○一本に、卯月ばかりのとあるは誤なるべし。

一吾

あひ見しもまだ見ぬこひもほととぎす月になく夜ぞよ又なかりける異に似ざりける

○抄云、子規の月になく夜は、例に似ず恋まさるとなり。古今夏「ほととぎすなく声きけばあぢきなくぬし定まらぬ恋せらるはた、此心なるべしといへり。げにしかるべくは思はるれど、猶いさゝかいぶか(四)しき所もあれば、よくく考ふべし。師翁云、此歌はもし逢ふまじきみそか事の人に逢たる後にやりたるにて、其逢たるよしは、詞にはあらはしがたくして、逢ひ逢はざるのなかばをいひて、まぎらはして、その時のあはれ、男女互の情をふくめたるにもあるべしといはれたり。世に似ずとは、なみくならぬ意なり。世にしらぬ、世に見えぬ、などいふ詞、源氏物語など、拾遺夏に、謙徳公の北の方、ふたり子どもなくなりて後、二今子どは、藏人ノ頭左近ノ少将奉實は廿五、右近ノ少将春官ノ權ノ允義孝は廿六、天延二年九月十六日に、同日に身まかり給ふよし、其をりの事なり。「あまといへどいかなる海人の身なればか世に似ぬしほをたれわたるらん、とあるなどを引合せて心得べし。

女のもとにつかはしける

一兵 ありとのみ音羽の山の郭公きゝに聞えてあはずもあるかな(五オ)

○ありとのみ音は聞えてとつゞく意にて、時鳥の声は聞えながら、形の見えざるにたとへたるなり。初二句のつゞきは、古今夏「思ひ出るときは山の山の時鳥々」とある類なり。さて、おとは聞えてといふを、郭公の声はと云意にきかせたるなり。鳥獣などの声を、音(オ)といへる例は、万葉十八山は玉の月にむかひて雲公鳥なく於登(オ)し、古今秋上「秋萩をしがらみふせてなく鹿の目には見えすておとのさやけさ、など猶あり。」はるけし里遠みかも 同五「鶯のおとまくなべに梅花我家のそのにきてちるみゆ、又鹿にもいへるは、然れどもその声といふを、女の方にとりては、たゞありとのみ聞えてといふ意のみなり。此ことはよくせずはまがひぬべし。女のありと聞ゆとは、存在と聞ゆる事にて、古今旅又、伊勢物語「名にしおはゞいざことゝはん都鳥我思ふ人はありやなしやと、又、下五維「年をへていけるかひなき我身をば何かは人にありとしられん、又、「あり(五ウ)とだにきくべきものを相坂の関のあなたぞはるけかりける、などに同じ。猶下にもいきゝに聞えてと重ねていへるは、其事をつよくいへるにて、「ふりにふる、下維二「いづれをか雨ともわかん山 伏のおつる涙もふりにこそふれ、「たちとたつ、下維三「かざすともたちと立なんなきなどいふ詞の類なり。

題しらず

いせ

一兵 ことがくれてきつきまつとも杜宇はねならはしに枝うつりせよ

○五月を待て鳴んとて、木隠て居るとも、羽ならはしにも、枝うつりして、こなたかなたにうつりて、我宿の梢にも来鳴けとなり。郭公は、宿近き橋などにて鳴空を鳴わたるさまによめるも多ければ、こゝは木隠てといひ、羽ならはしにといふより、枝うつりせよとはいへるなり。さて枝うつりせよといふに、おのづから、

我宿にも来鳴けと云(六才) 意はふくみて聞ゆるなり。五月待といへるは、此鳥は四月を忍音、五月をおのが時となくなどもいひて、もはらは五月になければなり。古今夏「さつきまつ山時鳥うちはぶき今もなかな去年のふる声、伊勢集四月つ「木がぐれてさつき待間のほとゝぎすまだしきほどの声をきかばや、などもあり。

藤原かつみの命婦にすみ侍ける男、人の手にうつり侍にける又のとし、かきつばたにつけてかつみにかはしける

※つかね緒云、藤原かつみの命婦にすみ侍けるに、人の手にうつり侍にける又の年、かきつばたにつけてつかはしける。

○此詞書、いとまぎらはしくてわきまへがたし。男とあるは、歌によるに、作者のみづからの如く聞ゆれば、のぞきて、右上ニ配タルヲの如く改めて見べし。もしくは、男は他のをとこにて、其男の、他の女の手にうつれることをとぶらひやれるかとも(六才)思へど、さては歌にあはず。人の手にうつるは、かつみが他の男にうつれるなりと、つかね緒に見えたり。

良峯義方朝臣

一六〇 いひそめし昔の宿のかきつばた色ばかりこそかたみなりけれ

○此杜若のみこそ、昔我が通ひすみたる時の、かたみにて、ゆかりともいふべき色なれ。其他かの事は、すべて昔にも似ずなりぬる事よといふ意にて、杜若の色ばかりこそと、上下の句の間に、の文字を入れて聞く意なるべくは思はれるど、猶いさゝか心得がたきふしもあり。そは、詞書と合せて見るに、二句、昔の宿といへるは、即かつみの命婦の家の事にて、其家に咲てある杜若を折て、今かつみの居る寮中局など

にやりたるならんか。さらでは、二ノ句の宿といふ事心得がたし。(七五)六帖には、「昔の人のとあれども、さてはいよ／＼よろしかるべくも思はれず。又初ノ句、いひそめしといふ詞も、いさ／＼かたしかならぬこゝちす。詞書ことたらぬにやあらん。なほよく考ふべきなり。

賀茂祭の物見侍ける女の車に、いひ入て侍ける

○賀茂ノ祭は四月の中の酉ノ日なり。公事根源云、昔夢の告侍しより、今日人々葵桂アヲヒヒカグラのかづらをかくるなり云々。

よみ人不知

一六二 行かへるやそうち人の玉かづらかけてぞたのむあふひてふ名を

○三ノ句までは、かけてといはん料の序に、其日の物を以ていへるなり。趣意は、葵アヲヒを逢日アヲヒにとりなして、逢といふ名を、心にかけてたのむとなり。やそ氏は、天皇に仕へ奉る氏々の多くの人をいふ(詔詞などに、八ヤントモヲ)とあるもおなじ。をもとにて、たゞ世中の多くの人といふ意にもいへるなり。冠辭考、ものゝふのやそ氏人の条に委く見えたり。此歌などに遣ひたるは、今日賀茂ノ御社ミヤツに詣とて、行かへる多くの人といふ意なり。玉かづらは、今日人人の頭に懸る、葵桂アヲヒの鬘カヅラをいふなり。玉かづら、花かづらなどの事、委くは下雜四にいふを見て心得べし。四ノ句のかけてといふ詞は、心にかくるにも、口のはにかくるにも、趣意をば軽くも重くも、いと広く遣ふ詞にて、集中にもいと多く見えたれば、此所に前に例などは引いせず。

返し

一六三

ゆふだすきかけてもいふなあだ人のあふひてふ名はみそぎにぞせし

○初ノ句木綿襦ユフダスキは、枕詞ながら、其をりによし有物を以て冠らせたるなり。我はあだくしき人に逢ふといふ事は、御被にはらひすてつれ(ハ)まば、今はあふひなどいふ事は、口のはにかけてもいひ給ふなとなり。末ノ句には、古今恋「恋せじとみたらし川にせしみそぎ神はうけずぞなりにけらしも」とある歌の意もあるべしと、わが友古道いへり。

題しらす

一六三

このごろは五月雨近み杜鵑思ひみだれてなかぬ日ぞなき

○五月雨は、思ひ乱てといはん料に其時の物を以ていひ、郭公は、なくといはん料の序なり。此歌、貫之集の恋ノ部に入たる歌にて、げに恋の意にて、六帖に「五月雨に乱そめにし我なれば人をこひちにぬれぬ日ぞなき」とあるなどの類とおぼし。猶思ふに、初二ノ句のさまは、五月雨の中には、男女の逢ふ事を忌むといふ諺によりていへるにもあらんか。もし然れば、二ノ句は、思ひ乱てといはん料のみにあらず(ハ)こ、用ある詞なり。

一六四

まつ人は誰ならなくにほととぎす思ひの外になかばうからん

○抄に、我こそまつに、我方ならで、思ひの外に鳴かばうからんとなりとあり。げに此意なるべし。

此歌などのてをば、玉緒、四の巻卅八葉四十二葉、二所に、一つの何、此格、結にかゝはらずとて、古今十四「みちのくの忍ぶもちずり難ゆゑに乱んと思ふ我ならなくに、同一津の国の女には思はず山城のとはに逢見ん事をのみこそ、万葉八「いづくには鳴もしにけん時鳥わきへの里にけあみぞなく、古今十二「ひしなはたが名はたゞし世中の常なき物といひはなすとも、又右の「まつ人はたれならなくに云々の歌を出されて云、此格は、そのまじりていふ物に對へて、それならぬ他の物を何といふなり。古今十四の歌は、思ふ人に對へて、其他の人をたれといへり。君をおきて他の人故にみだれんと思ふわれなら

一六五 にはほひつつちりにし花ぞおもほゆる夏は緑の葉のみしげれば(九七)

なくになり。「いづくには鳴もしにけんは、他の所には鳴もしにけんなり。万葉には猶多しなど、委しくはれた
りか、れば此歌なるも、侍人は我なり、他の人にてはあらず、然るを他(ホカ)の所になかば云々と云ふなり。

○抄に、心は明らかなり。青葉につけて、猶花をしたふ意なりとあるが如くなるべし。此歌、何とかやゆゑありげにも聞ゆれば、玉葉四維に、後朱雀院の御ことをおぼしめしなげきて、白川殿におはしましたけるころ、四月ばかりに、御前の花は散はてて、青葉なる梢を御覧して、「上東門院」をしまれし梢の花はちりはていとふ緑の葉のみ残れる、とあるなどの類にやとも思へど、なほ、菅家万葉集下巻にも、夏部に載せ給ひて、此下ノ巻の時、後人のわざなるべきよしは、人々の説ありて、げに然るべ
くは見ゆれど、又、中にいさゝかは、とり用ふべきふしなきにしもあらず。朱明稍来^チ春花薄^シ、春陽暮行^チ公鳥忽^{ハシ}、
妬涙嫉声^ス霑^ス二馥袖^ヲ、細雨軽風不^レ起^サ塵^ヲ。と云^フを添へられたれば、抄の説の如く、夏になりて、花をし
たふ意なるべし。

朱雀院の春宮におはしましたける時、たちはきら、五月ばかり御書(九ウ)所にまかりて、さけなどたうべ
てこれかれ歌よみけるに

大春日師範

○此朱雀院は、承平の帝を申奉るなり。上春部などに、院の御所のされば、こは朱雀院のみかどなど申奉る
べき事なり。此帝のいまだ春宮にて大ましました時、春宮は美古乃美夜(ミコノミヤ)とよむことなれども、此所なるは
しまなればなり。さて春宮とは皇太子(ヒツタチ)を申奉ることは、いふもさらなり。春宮の帯刀等^{オビタチ}が御書所に来てなり。帯刀は春宮の侍の官なり。禁中
には滝口といひ、春宮にては帯刀といひ、院にては北面といふ。皆同じ武士なりと、縣居、大人い

一六

五月雨に春の宮人くる時は郭公をやうぐひすにせん

はれたり。職原抄、春宮坊ノ条下云、又、帶刀者、撰ニ重代侍ニ補レ之。自ニ公家ニ被レ補レ之、也。昔者源平ノ重代ノ武士、多ク補レ之。など見えたり。御書所ノまは、秘書を蔵むる所なり。それを預る司なり。和名抄に蘭林坊、在式部門ノ内ノ東ニ、今分爲ニ御書所ト是也。拾芥抄に在侍從所ノ南、有ニ公卿別當預。云々

と見ゆ。大春日ノ師範は、隼人ノ佐、御書所ノ預。と作者部類に見えたり。
○春の宮人は、春宮の御方の人といふ事にて、即帶刀をいふなり。春といふ詞によりて、郭公を鷹にしてや聞んとなり。頗基集に、秋の夜めし有て、春宮にまゐりて、雁の鳴を、「なくかりは来るか帰るかおぼつかぬ春の宮にて秋の夜なれば、とあるなども似たるいひなしなり。

夏の夜、ふかやぶがことひくを聞て

藤原兼輔朝臣(十)

一七

みじか夜のふけゆくまゝに高砂の峰の松風ふくかとぞぞきく

○抄云、松風入_レニ夜琴_ニの心なり。夜の更るまゝに、音もすみまされば、たゞ松風と聞ゆるとなり云々。師翁云、峰の松風とあるは、朗詠に、索々_ル秋ノ風拂_テ松_ノなどの意、又外にも、琴の音によしある故事本文多かるべし。さるを、下次の歌にては、伯牙の故事の意にとりて、よまれたるなるべし、其よしは、下と委くいへり。といはれたり。然れば、此歌にては、たゞ峰の松風ときくといふ意のみに見るべきなり。拾遺_上「琴の音に峰の松風かよふらしいづれのをよりしらすめけん、などの類猶多し。

おなじこゝろを

貫之

一六

あしひきの山下水はゆきかよひ琴のねにさへなかるべらなり

○師云、上兼輔の歌に、「高砂のみねの松風とあるを、此歌にては伯牙絶十一絃の故事の、志在レハ三高山ニ云々の事にとりなされたるなるべし。高砂の峰の云々ともあれば、高山といふによしあるなり。よりにて、ニ云々の事にとりなされたるなるべし。高山といふによしあるなり。よりにて、志在レハ三流水ニ云々の意を以てあしひきの山下水とよまれたるなるべし。二三句を、山下水に「行通ふ」とすれば、水の音に行かよふ琴の音といふ事になるなり。其山下水に通ふ琴の音をきけば、感ぜられて、音に泣くとよめるなり。琴の音にさへといふは、琴をきけば、琴の音の音に泣ると受たるなり。流ると泣るとを言のあやにいひなせるなりといはれたり。また、瓶麻呂は、主の君の弾給キタへる琴の音をきけば、旧フルよりいへる如く、かの流水の声に通ひて聞え侍りといふのみなり。上の兼輔卿の歌に、松風の声に聞なされたれば、これは峽水の音に聞なせるなり。さて、かく松風流水に聞なせるさまをよめるは、琴を十一賞する詞はあらねど、しか聞なすにて、おのづからはむる意はあるなり。かくて下句、音にさへ泣ると、感涙を催す事をよめるなり。然れども、そは裏の意にて、表はたゞ流るゝ事のみなりといへり。美石云、琴の音に感じて涙を流す意にいへるは、めづらしき事にはあらねど、猶万葉七「琴とればなげきさきたつけだしくも琴の下樋につまやこもれる、同十八「我せこが琴とるなべにつね人のいふなげきしもいやしきますも、うつほ物語上「琴の音も昔にすめる暁は水もながれて悲しかりけり、など猶多くあり。又古道は、此歌は、たゞ山下水は琴の音にまで流ると見ゆ、さやうに聞ゆるよ、今宵主の水調アノツにしらべらるゝ爪音をきけば、泉の流出る音かとも聞なされて、さてさていさぎよき涼しき事にて侍りといふのみにて、泣るとかけた十二さるにはあらずといへり。

題しらず

藤原高経朝臣

一六 夏の夜はあふ名のみしてしきたへのちりはらふまに明ぞしにける

○逢恋の歌なり。夏は短夜なれば、逢といふ名ばかりにて、床の塵を払ふ間に明たる事よとなり。敷たへは床枕などの冠辞なるを、やがて床の事にしたるなり。拾遺巻下「長きよなく、しきたへの、ふさずやすまず、明くらし云々とあるなどの類なり。されど、かくさまに枕詞をやがて其物の事に用ひたる事、万葉には巻三に「足日本能石根許其思美云々、巻十一に「足檜乃下風吹夜者公平之其念とあるなどの外には、をさく見えず。古今集などより後には、をりく見えたり。猶此事は論ふべき事あれども、事長ければ末にいふべし(十二三)。

みぶのたごみね

一七 夢よりもはかなきものは夏の夜の暁がたのわかれなりけり

○此歌忠岑集に、「忍て女の許にまかり侍しに、いくばくもなくあけ侍しかば、女に」と詞書あり。これにてことによく聞ゆ。

あひしりて侍ける中の、かれもこれも心ざしはありながら、つゝむことありて、えあはざりければ

よみ人しらす

一八 よそながら思ひしよりも夏の夜の見はてぬ夢ぞはかなかりける

○逢たりと見るまもなくさむるは、夏の夜の夢は短くはかなからんと兼て思ひしよりも、又一きははかな

き事よとなるべし。よそながらとは、我身の上にとらで、たゞおほよそに思ひたるをいふなる(千三〇)べし。見はてぬ夢とは、思ふ人に逢ふと見つるまもなくさめたるをいへりと聞ゆ。古今^二「命にもまさりてをしくあるものは見はてぬ夢のさむるなりけり、などの類なり。此歌にては、たがひにつゝむ事あれば、心ざしはあれども、うつゝにてはえ逢はずして、忘るゝまもなく思ひ居る夢に、ほのかに逢たりと見たるも、夏の短き夜の事なれば、いとほかなかりし事ぞといふにて、忘るゝまもなく思ひ居るよしを、女の許にいひやりたるが趣意なるべし。師云、此歌、詞書の一本に、あひしりて侍ける後、かれもこれも云々と云を用ふる時は、夏、夜などに一度逢て、その後は互に障事^{ツルギ}ありて、得逢ざる時の歌と見るべきなり。さては、「よそながらといふ事は、いまだ不逢^{アスガ}し已前をいふなり。いまだ不逢^{アスガ}うち、よそ外より心を懸て思て居るは(千三三)、甚はかなき物なり。しかるに、夏の夜一度逢見たれども、実に夢の如くにてありしかば、それを見果ぬ夢ははかなき事なりしよといふなり。よそ外に恋しく思ふにくらぶれば、たとへ夏、夜にても一たび逢たるは、はかなき恋と云にはあるまじけれども、我中の夏、夜の夢の如くに逢たるは、よそに思ひしよりもはかなしとはよめるなるべし。もし此説の如くならば、古今^三の、「うは玉のやみのうつゝはさだかなる夢にいくらもまさらざりけり、などの意と同じかるべし。されど、こは試にいふのみなりといはれたり。

なつの夜、しばし物がたりしてかへりにける人のもとに、又のあしたつかはしける

○又のあしたは、翌朝^{アサ}なり。(十四五)

伊勢

一七三
ふた声ときくとはなしに時鳥夜ふかく目をもさましつるかな

○抄に、物語してあかで帰し残念を、二声ともきかぬ郭公にそへてよめるなりとあり。今思ふに、詞書のさまは恋歌とも聞ゆ。然らば、夜ふかく目をさますとは、起て別つる事をいふなるべし。又家集には、夜ふけて郭公の一声なき侍しに、と詞書あり。かくてはたと夏夜^{ナツノヨ}の歌なり。

人の許につかはしける

藤原安国

一七四
あふと見し夢にならひて夏の日の暮がたきをもなげきつるかな

○うつゝにて逢ふことはもとよりかなはざれば、せめては夢にだに^{ナニ}と思ひし、其夢に逢ふと見つれば、それにならひて又再度^{フタト}逢ふと見る夢もがなと思ふに、夏の日の長ければ、其くれがたきをなげきつる事かなとなり。くれがたきをもとあるは、逢ひ難きをなげく其うへに、又日の暮難きをなげく意なればなり。

よみ人しらず

一七五
うとまるゝ心しなくは郭公あかぬわかれにけさはなかまし

○疎まるゝ身は、別をもをしみ兼る心を、時鳥に比してよめり。「名のみしてしでのたをきは今朝ぞなくいほりあまたとうとまれぬれば伊物、と抄にはあり。師云、一首の意は今宵此所にて逢て別るれども、我を疎^{ツト}じてうとくもてなして、心もとけず、実に逢事はなかりしを、もしうとまるゝ心なく、むつまじくうちとけられて別るゝ暁な^{アサ}十五さらは、あかぬ別をしてなくべきに、あかぬ別ならず、うとまるゝ別になく

といふやうなり。されど、此説さだめてはいひがたし。うとまるる心しの、心といふ事おだやかならぬ詞の遣ひざまにて、よくは心得がたしといはれたり。壘麻呂云、今朝の別になごりをしげも見え給はぬは、兼て庵あまたの御身に、かつはうとましく思ひ居侍るなり。それは御心の浅きゆゑなればぞかし。もしうとまれぬ御心なれば、必^ズ涙にむせびて、我と同じさまになき給ふにてあるべき物を、と云意にて、古今^夏「時鳥ながなく里のあまたあればなほうとまれぬ思ふものから、を本歌にとりたるにはあらじかといへり。

思ふ事侍けるころ、杜鵑を聞て

一七五

をりはへて音をのみぞなくほとゝぎすしげきなげきの枝えだごとこに居ゐて伊勢集（十五ウ）

○あの郭公の木のしげみに居て、声たえずなく如くに、我もなげきのしげき中なれば、時長く間もなく泣てのみ居る事よとなり。枝ごとには、なげきのしげきよしを強くいへるなるべし。大和物語に、「なげきのみしげきみ山のほとゝぎす木がくれゐても音をのみぞ鳴く、とあるも大かた似たるいひざまなり。

一七六

四五月ばかり、遠き国へまかりくだらんとするころ、ほとゝぎすを聞て
時鳥来ては異きけば旅とや鳴わたるわれはわかれのをしきみやこを

○郭公は此都をしも旅にて住うきとて、あの如く鳴わたることにや。我は住馴たる故郷なれば、別がたき都なるものをとなり。杜鵑は山より出て鳴渡る間を、かれが旅路といひなす事、万葉卷十に、「旅に十六まして妻こひすらし郭公神なび山にさよふけてなく、などの類なり。みやこは宮所みやとにて、天皇の大宮のあ

る所にかぎりていふ事なり。都、字になつむべきにはあらず。いはゆる都会の意と心得るは、非なり。こは事のついでにいふのみ。

だいしらず

一七 ひとり居て物思ふ我をほとゝぎすこゝにしもなく心あるらし

○此歌は、万葉卷八には、「ひとりゐて物思ふよひに郭公こゆ鳴わたる心しあるらし」とあり。かくさまに載せられたるは、即万葉集をよみとかしめ給ふついでなるよしは、初に配たるが如くなれば、万葉の調点といふものは、此時代に論ひ定められたる事と聞ゆ。さて後世々を経て、誤れるふしく、違へる所々いと多くなりたるを、又近き世になりて、古事字の違さかりになりて、人々種々に考へさだめなどして、ヤ(十六ウ)よろしくなれるさまにはあれども、なほいづれか正しく古への調にかなへる、そはしりがたき事なり、然れば今世にある万葉の調に引合せて、此集など載せられたる方を、引直されたるなりとさだめいふんは、いかゞなる事なればなり、こは例のついでにいふなり。

かくて一首の意は、物思ひをなぐさめがほになくは、心あるに似たりといふなりと、万葉の仙注にも略解にもあれども、今思ふに、なぐさめがほにといへるは、過たるやうなり。たゞ我一人なげき居るあたりに来てなくは、汝も物思ひのあれば、かくわびしき我宿にしも来たるにか、いかさまにも心ありてなくなるべし、といふ意にて、古今夏「あしひきの山時鳥をりはへてたれかまさると音をのみぞなく、拾遺^三」しのゝめに鳴こそわたれほとゝぎす物おもふやどはしるくやあるらん、などのたぐひなるべく思はる。

一八 玉くしげ明つるほどの杜鵑たゞ二声もなきてこしかな一本

○玉櫛笥は、あけといはん枕詞にて、二声のふたへも掛れり。夜明方の郭公の多くは鳴かずに、たゞ二声鳴て来たる事かな、不足^{フカス}ことよといふなるべし。又思ふに、恋の意にて、夜明つるほどのあはたゝしさに、別をゝしみて二声と泣いても居ずに、急ぎて帰たる事かなと云つて、末句一本に、なかでとある方を

用ひんも、然るべからんかとも思はる。

五月ばかりに、物いふ女につかはしける

○物いふ女は、相かたらひ居る女といふ意なり。

きかずや 一本

二五

数ならぬわがみ山べのほととぎす木の葉がくれのこゑは聞ゆや

○数ならぬ我身といひかけたるなり。かく数ならぬ身なれば、郭公の木蔭にて鳴くが如く、忍び／＼に心をよする、その心のほどをば知る（せしむ）かとなり。新勅撰夏「すむ里はしのぶの杜のほととぎす木の下こゑぞしるべなりける。

題しらず

二六

とこなつに鳴てもへなん時鳥しげきみ山になにかへるらむ

○とこなつには、長とこしなへにいつまでもといふ意なり。此詞の事、末に委しくしげきみ山には、たと山にといふいふを見合すべし。

意にて、繁きタタといふに異なる意はあらざるべし。趣意は、古今夏に、「今さらに山へ帰るな時鳥こゑのかぎり是我宿になけ、とあるにやゝ似たり。かくて、み山といへば深き山の事と心得るは非なり。必しも深山ならでも、重オカなれる山の、口方此なるをば外山といひ、奥方彼なるをばみ山といふ事なり。古今集神遊の歌に、「み山にはあられふるらしと山なるまさきハまのかづら色づきにけり、とあるなどにても心得べし。み山のみは、深と書くは、み熊野、み吉野、万葉に真熊野、真吉野など書たるも、同じく仮字ながら、字義や、近し。み雪これも雪の深きなどのみと同じく、賞て添ふる心ばへなり。

一八一
ふすからにまづぞわびしき時鳥なきもはてぬにあくる夜なれば

○ふすからには、臥ふと其まゝにといふ事にて、一首の意は、夏夜の短きをわぶるにて、古今夏「夏の夜のふすかとすれば時鳥なく一こゑにあくるしのゝめ」とあるによりたるにもあらんか。又おのづから同じさまによみ出たるにもあるべし。古歌に此類の事は、いと多ければなり。 いづれにしても、此古今の歌を引合せて心得べきなり。

※ふすからに云々を、俗言に臥ふは、寝ルヤ、ナヤ、マツサ難義ニ思ハレルと云フに近シ。

三条右大臣、少将に侍ける時、しのびにかよふ所侍けるを、うへのをのことも五六人ばかり、五月のなが雨すこしやみて、月おぼろうなりけるにさけたうへんとて、おし入て侍けるを、少将はかれ方に侍らざりければ、たちやすらひて、あるじいだせなどはぶれ侍ければ

あるじの女

※つかね権云、三条ノ右大臣、少将に侍ける時、忍に通ふ所侍けるを、うへのをのことも五六人ばかり、五月の長あめすこしやみて、月おぼろなる夜、酒たうべんとて、かの女のもとにおし入て侍けるを、少将はかれがたにて侍らざりけるに、立やすらひて、あるじい出せなど戲侍ければ、あるじの女

○三条ノ右大臣の、いまだ少将にておはしたる若きころ、忍て通ひ給ふ女の所のあるを、知居たる殿上人たち、殿上人とは四位にて殿上をゆるされたる人。いふなり。委くは、維一にいふを見るべし。 五六人ばかり、五月雨すこしやみて、月の朧なる夜に、此女の家に酒飲んとて、俄におし入たるに、其ころは、少将はもはや此女をば離方はなむちなりしゆゑに、其夜も其女の許には居給はざりしかば、殿上人達立休らひて、少将をは女の隠したりと思ふさまにて、少将あるを出十九させなど戯たるこたへによみたりとなり。さて、「かれがたにて侍らざりければ、立やすらひて、とある詞のさまにて見れば、今宵必、少将は例の如く居たるべし、其

所へおし入て、少将をわびしがらせて、さて酒を飲んといふいひ合せにて、ふいにおし入たるに、少将の居られざれば、其おもぶきかはりたるゆゑに、手もわ立やすらひて、あるじ出せなどいはれたる事と聞ゆるなり。此詞書など、もとのまゝにては事たらぬやうなるを、つかね緒になほされたるにて、いとよく聞ゆるやうになりたるはさらなれど 全体の書ざま、いとく打とけていりくみたる事を、ことずくなにて、しかも其時の有さま、人の心ばへなど、見るが如くに書とられたるは、まことにみさかりなる世のてぶりにて、後世の人などの、かけても及ば（十九）ざる事なり。此事は猶別記に委くいへり よく心して味ひ見るべきなり。

一八三

五月雨にながめくらせる月なればさやかに見えず雲隠つゝ

○少将を月になぞらへて、我待てながめくらせども、此ごろはかれ方なるゆゑに、さやかに見えずとなり。心苦ナガメに長雨をかけたるは論なし。末句雲隠つゝといふにも、何方へかまぎれありき給ひつゝといふ意をふくむならんか。

をんな子もて侍ける人に、思ふ心侍てつかはしける

よみ人しらす

一八三

ふたばより我しめゆひしなでしこの花のさかりを人にをらすな

○いとけなきほどより、我物と心には領じ置たる女の子なれば、他の人の物とはするなとなり。万葉三に、「印結シノヒメ而我定ワカサダメてし住吉の浜の小三千吉松は後もわが松、とあるに同じ心ばへなり。しめゆふといふ言は、万葉二に、「おくれ居て恋つゝあらずば追及オヒシクムと武道のくまみに標結シノヒメ吾勢ワガセ、とありて、縣居シノヒメ大人云、山路などには、先ゆく人のしるべの物を結ムスをこゝにはいへり。此同言にて繩引わたして隔のしるしとし、木

などたてゝ標とするもあり。事によりて心得べしといはれ、又卷二に、「あかねさす紫野ゆき標野行云々」とあるは、しめおかれて、御狛し給ふ御野をいひ、卷二に「さゝなみの大山守は誰為か山に標結君もまさなくに、とあるは、人を入しめぬしをいひ、同「かゝらんとかねてしりせば大御船はてしとまりに標結ましを、とあるは、こゝの汀に御船のつきし時、しめ縄ゆひはへて、永く留め奉らんものをといふにて、古事紀天ノ岩に、布刀玉命、以尻久米繩控三度其御後方一言、從三千〇此以内不得還入、とある類なるよしもいはれたり。これらを合せて見れば、よく心得らるゝなり。かゝれば、此「ふた葉より我しめゆひし云々、「印結てわがさだめてし云々などは、標立繩引わたしなどして、我物とし、他の人に手ふれさせぬやうにしおきたる、牛麦小松などになぞらへていへるなり。

題しらず

一八四
あしひきの山時鳥をり古今うちはへてたれかまさると音をのみぞなく

○古今に入たる歌なり。我物思ひありて、なきてのみ居る時しも、彼も時長く間もなしに、我にきそひ顔になくよとなり。うちへ、をりはへの、はへは、延の意にて、長くつとく意なるよし、鈴屋、大人いはれたり。
うちはへと、をりはへと、いさ、かの心ばへは遠へとも、まづは同意なり。古今雜上に、「咲そめし時より後はうちへて世(二十一)オは春なれや色の常なる、とあるなども思ひ合はずべし。さて延(へ)と三言は、今の俗にも、女の纏の紐(タテイト)をのぶるに、一トはへよた延(へへ)といひ、漁の網の横に長きを引廻らすをも、網をハヘルといひ、其網をもやがてはへあみといへり。

五月なが雨のころ、ひさしくたえはべりにけるをんなのもとにまかりたりければ

※つかね緒云、五月長雨のころ、久しく絶侍にける男の、まて来たりければ、をんな

女

一五

つれづれとながむる空のほととぎすとふにつけてぞねはなかれる

○久しく絶給ふに、心苦ナガクをして居るころなれば、かくおとづれ給ふがうれしきにつけても、日ごろのたえのうさも思ひ出られて、ねになかれ侍るよといふなり。

題しらず

○

○よみ人不知といふ事落たるかと、契沖法師いはれたり。(二二一ウ)

一六

色かへぬ花橘はほととぎす千代をかたはよ言を聞ゆる中務集ならせるかたはよ言を聞ゆる中務集ことゑ聞ゆなり

○千代をならせるは、久しからん事をかねて馴しむるなり。橘は、万葉六に、「たちばなは実さへ花さへ其葉さへ枝に霜ふれどいやとこはの木、などもいひて、ときは木なれば、色かへぬといひ、さて郭公の千代も来馴ん心あるさまにいへるなり。此歌中務集には、屏風の絵に、時鳥なく、と詞書あり。かゝれば賀の時の屏風などなるべければ、祝の意もあらん事、ことにつきづしく思はる。

一七

旅ねしてつまごひすらし時鳥神なび山にさよふけてなく

○万葉十の歌にて、初句「旅にしてとあり。略解云、旅人の故郷を恋るによそへてよめり。神奈備山は、大和国高市郡にて、神なびの杜も同所なるよし、契沖法師いはれたり。(二二二オ)

一八

夏の夜に恋しき人の香をとめば花橘ぞしるべなりける

○抄云、恋しき人の香は、橘に異ならねば、恋しき人の香をとめてゆくに、花橘をしるべとなり。「昔の人の袖の香ぞするを、本歌にてなりといへり。思ふに、趣意はげに抄の説の如くなるべし。然れども、「昔の人の云々を本歌なりといふは、いかゞあらん。此歌よみ人しらずなれば、古今の歌より先ならんや後ならんや、しりがたければなり。六帖に、「時鳥花たちばなの香をとめてなくは昔の人や恋しき、とあるなども、大かた同じころの歌なり。」

女の物見にまかり出たりけるに、こと車かたはらにきたりけるに、ものなどいひかはして、後につかはしける

○初の、女のといふ事除くべく、又まかり出の出の字なき本は二十ニニわろきよし、つかね緒に見えたり。

伊勢

一八九 郭公はつかなる音を聞そめてあらぬもそれとおぼめかれつゝ

○わづかなりし声を聞てより後は、それならぬ人の声も、其人かとおぼめきたどらるゝ事よとなり。おぼめくとは、いかゞあらんとたどらるゝ意の詞なり。おぼつかなし、おぼくしなどと相通ひて、いささかづゝ異なり。もとはおぼるといふ言の活用たるなるべし。

五月ふたつ侍けるに、思ふ事侍て よみ人不知

一九〇 さみだれのつゞける年のながめには物思ひあへる我ぞわびしき

たえぬ人ぞかなしき 伊勢集
あへる我ぞわびしき
そめる我ぞ悲しき 六帖

○抄に云、閏五月の長雨に、物思ひをさし合せたるがわびしとなりと二二三三あり。今おもふに、此あへる云々と云う詞は、心得がたし。物思ひあへぬ、物思ひあへずなど云は、皆おふせずの意なり。「梶とりあへぬ恋もする哉方」「とりあへぬまでおどろかすらん書木など、皆然為不レ遂ニの意なり。又、「花橋にあへぬくがね万葉などは、令ア合ハセの意にて、まじへ合はする意なり。然れども、物思ひあへるといふ事は、右件のあへとは別意なるべく思はるれば、外に例なども思ひ出ず、心得かねたり。

師云、然り。心得がたし。されど、まづは抄の説の如く、折にあふ事にて、折しも五月雨の時にさし合せて物思ふと云意にてもあらんか。猶よく考ふべき事なり。大平は伊勢集「物思ひたえぬ云々の方を是と思へりといはれたり。

女にいと忍て物いひて、かへりて二二三

一九二 杜鵑ひと声にあくる夏の夜の暁がたやあふごなるらん

○古歌夏に、「夏の夜はふすかとすればほととぎすなく一声に明るしのよめ、ともある如く、甚短き夜なるに、又忍てかたらふ事なれば、とやかくやと人目をつゝみなどして、他の人はもはや別るゝ比の暁方が、やうく」と、我が中の逢期にてやあらんとなり。逢て程もなく別たるの、あかぬよしをいへるなり。逢期は、逢時アヲトキといはんが如し。古今雜「人恋ることを重荷とになひもてあふごなきこそわびしかりけれ」とあるも、物荷ふ初(アヲゴ)にか意は同じ。猶此集恋二恋にも、逢期といふ詞は見えたり。又拾遺恋に、「もえはてゝ灰になりなん時にこそ人を思ひのやまごにせめ、とあるも、止ん時ヤといはんがごとし。二三四

題しらず

一五三

うちはへて音を鳴くらすうつ蟬のむなしき恋も我はするかな

○打はへは上にもいへり、時延ツリベと同じ心ばへの詞にて、時長くつゞくをいふなり。さてうつせみのといふまでは、むなしきといはん序ながら、上、句も、我身の上にとへたるにて、いたづらにいへるにはあらず。むなしき云々とは、音のみなきくらす、其かひもなき恋をも我はする事かなといふなり。恋の歌なる事は論なし。うつ蟬のむなしきといへるは、古今歌「うつ蟬はからを見つゝもなぐさめつ云々とあるなどの如く、

蟬脱ヒナヒナの意にていへるなり。かくて、蟬をうつせみといふは、古今以後の事なり。古事記、日本紀、万葉

などに、此詞いと多く見えたれども、皆蟬の事には頭しき身ウツ、頭ウツの世などいふ事にて、今の世の(二十四)頭(ウツ)の身の人など云意のみなり。理縣居、大人も、空蟬など書しは借字なるを、後人は空蟬の字に泥て、今(ウツ)にある身(ウツ)今(ウツ)比(ウツ)型(ウツ)ン蟬脱モメケの事とのみ

思へり云々。さてうつしきとも、うつせみともよみて、うつせみとのみはいはず。其うつしきは、頭しき

身てふ意にて正しきを、うつそみうつせみなどいふは、音の転ウツろひし物なり云々。古今和歌集の比に下り

ては、即ち蟬のもぬけに譬て、はかなき意にもいひなし、又蟬をやがて「夏はうつせみ鳴くらしともよみ

たるは、もぬけするものなれば、いきてあるをしも、うつせみといふ事となれるものなり。是らはたど、

かの空蟬の字を心もせで見て、古語を忘れたるなりけり。古今集の比は、中世の下ウツなれば、やゝ事のう

つり違へるもの少なからぬぞかしなど、委冠辭考にいはれたり。(二二五オ)

つねもなき夏の草葉におく露を命とたのむ蟬のはかなき

一五三

つねもなき夏の草葉におく露を命とたのむ蟬のはかなき

○抄に、炎天の草露はかきやすくはかなければ、常もなきとなり、とあるは過たり。二、句の、夏のと

云詞に深く泥むべきにはあらず、たゞ草葉におく露の、常にもあらぬ物を、命とたのむ事のはかなさよといふなり。つねもなきとは、常住ツツナにもなきといふ事にて、「うつせみの世は常なしと云々」、「世の中はつねにもがもな云々」などの、つねに同じ。命とたのむは、蟬は飲イて食はずなどもいひて、露のみを以て命を保タつものなればなり。

一五

やへむぐらしげき宿には夏むしのごゑよりほかにとふ人もなし

○此歌にいふ夏虫は、蟬をさしていへる事、次下に、「つゝめどもかくれぬものはなつ虫の身よりあまれの思ひなりけりとある、螢をさし二五〇ていへると同じ。何となく夏虫といへば、まづは燈蛾とよぶ虫の事なれども、又かくさまたいへば、一首の意を以て、蟬の事とも、螢の事ともしるる。なり、一首の意は、古今上秋に、「日ぐらしのなく山里の夕ぐれば風より外にとふ人もなし、とあるにやゝ似たり。

一五

うつ蟬のごゑきくからに物ぞ思ふ我もむなしき世にしすまへば

○抄云、むなしき世とは、はかなき義なり云々。蟬の声をきけば、我もはかなく常なき世に住居れば、かれが露を命とたのむにも異らずと思ひくらべられて、うちつけに物を思ふ事よとなり。菅家万葉に、「うつせみのわびしきものは夏草の露にかゝれる身にこそありけれ、とあるをも引合せて見るべし。

人の許に遣しける

藤原師尹忠異朝臣

一六

いかにせんをぐらの山の時鳥おぼつかなしと音をのみぞなく二五六オ

○小倉を、暗クラき事にいひなして、拾遺夏、「五月やみくらはし山の社字おぼつかなくも鳴わたるかな、いどの類なり。」くらき山の郭公の、そことなくたづくし

き音をのみなく事よといひて、さて、我も不逢不逢まのおぼつかなさを、音に泣てのみ居る事よとなり。おぼつかなしと云詞は、歌の裏裏の意の方にては、早く逢見まほしき事にいへるなり。待遠なる意をいへると同じ。

だいしらず

よみ人不知

一七

ほとゝぎすあかつきがたの一こゑはうき世の中を過すなりけり

○曉方は夜の竟つひなれば、夜を過すといふべき時刻なり。さて物思ひある人は、ことに夜はいも寝られず、泣明なみすものにて、郭公も夜なく物なれば、夜は憂き事のあるものとして、曉方に鳴たる一声は、其憂き事のある夜の中をはなるゝ、離わか際なるよとなるべし。夜中ヨシナカと世中と二十六ニ、詞同じければ、世間ヨシナカの意をこめて、憂世を憂夜にとり合せたるなり。六帖に、「うきよとは思ふ物から天の戸のあくるはつらき物にぞ有ける、とあるなども、憂世に憂夜をかねたるなり。

一八

人しれずわがしめしの床夏なでしこは花咲ぬべき時ぞ来にける

○抄に、恋歌にや、床夏は女の事に用ひ来れり。しめし野は、前に我しめゆひしと、同心なるべしといへるが如く、初句のさま、決して恋の意と聞ゆれば、人の娘のいまだ幼稚イノチヤウほどより、心の内には、我物と領うおきたるが、今はさる心ざしを見せてかたらはんも、然るべきほどに成長チカヒ、世ごころつきたるさまなるよといへるなるべし。三句は、いまだ幼稚イノチヤウころよりの事までにかけていへりと思ゆれば、なでしことある方、ことにつき／＼しく聞ゆ。二十七オ

一九 我やどの垣ねに植しなでしこは花にさかなんよそへつゝ見む 万葉

○此歌は、万葉巻八に出て、春、相聞万葉に相聞とあるはにて、「我宿にまきしなでしこいつしかも云々とあり。略解になでしこの花さかば、妹になぞらへ見んをとなりとあり。花にさくとは、はなやかに咲出るをいふなるべし。

二〇 ところなつの花をだに見ばことなしに過す月日もみじかかりなん

○三ノ句は、他には見及ばざる詞なれども、無事の意にて、為る事なく、閑暇なるをいへりと聞ゆ。河海抄帯木巻物に、又、昔忍草に物忌を書て、みすにもつけ、冠にもさしけるなり。是は、忍草の一名ことなし草といふにつきて、無事よしなり云々とあるは、異なるさはりなきよしにとりたるにて、ことなしといふ意はかかれども、無事といふ字の意に二十七八用ひたるは同じ。かくて一首の意は、無事にて過す月日は長く覚ゆるを、早く瞿麦の咲けかし。花を見てくらしだにせば、長しとも思はじをといふにて、貫之集に、「ところなつの花をし見ればうちはへて過す月日の数もしられず、とある類なるべし。

二一 ところなつに思ひそめてば人しれぬ心のほどは色に見えなむ

○思ひ初めてより、常にかくのみにてあらば、心のほども色に出て、そなたへも見えんといふを、時節の花の名によせて、歌のあやとせるにもあらんか。ところなつと云を、常しなへの意にいひたるは、万葉十七長にも、「曾能多知夜麻尔越中国の立山トコナツ、由伎布理之伎底云々とあるなどに同じ。ところなつのなつは、のど歌なり。草のどこなつといふ名も、花のどかに久し在アルよしの名な思ひそめてばを、染ソメ二十八オてへひよかせて、色に見えり。なでしこも、のどしこにて、同じ意なりと、鈴屋ノ大人いはれたり。

三〇二

いろといへばこぎもうすぎもたのまれずやまと撫子ちるよなしやは

かへし

○色に見えなるといふをとがめて、色といへば、濃き薄きの論なく、すべて頼難し、撫子も散る時なきかは、必^ズちる時のあればとなり。末句、散るよのよは、時といふに近し。さるは、よとくもにと、時じくにと同じ意、又忘るよなくなどいふよも、世の字にてはあれども、意は時といふに同じければ、かくさまに違ひたるよの詞は、いづれも時二十九さといふに近きなりと、師翁いはれたり。

なんといふにたくかはせたるなるべし。されど、こは瞿麦にかゝはる事にもあらず、一首の意にもあつからず、たゞ詞のあやのみなり。かゝることも思ひ混ふべからず。師翁云、二、句思ひそめてば、思ひ初る事にはあらずして、染ての意にて、深くしむる意と見て、とこなつに常住不絶^{ソネヒタユズ}、心の内に深く思ひ入れ、思ひしましめて有ならば、その深き心の量は、色に顯れなんと云意の如くも思はれ、又たゞ右等の説をすて、瞿麦の花の色の深きが如くに、て、こなつたと云、^ヤの言により、と、いさ、か解き難き歌なり。思ひ初て居るが、いよく、まこと大などいふ意なり。かくの如く、此花の色の深きが如くに、思ひ初て居る事ならば、てばの意を、名にしおはゞなどのば、と同じく、ならばの意に見るなり。人しれぬ我が胸の中の心の色、深き志の量も、今日に見る所の花の色の如く、人に見え知れ二千八百なん、といふ意の如くにも思はるれど、猶たしかにはこゝろ得がたき歌なりといはれたり。なほよく、考ふべきなり。思ひ初の意のみならず、思ひ染の意にいへる例は、古今十九に、「あふこと長歌のまれなる色に思ひそめ云々、とあるなどなり。

師尹朝臣の、まだわらはにて侍ける時、とこなつの花をよりて持て侍ければ、此花につけて、ないしのかみの方におくり侍ける

太政大臣

二〇三

なでしこはいづれともなくにはへどもおかれてさくはあはれなりけり

○作者太政大臣は、小一条、貞信公にて、師尹、朝臣は貞信公の末の子、内侍、かみは貴子といひて、同じく長女なり。然れば、尚侍子貴も師尹も共に我子にて、いづれともまさりおとりなき中に、をさなき方師尹は、わきてあはれに覚ゆるよとなり。あはれは、俗に、カアイキ、ムゴラシイなどいふに近し。六帖「名にしおへばいづれもかなし朝な／＼なでておふし／＼うなぬこがはら。二十九」

だいしらず

よみ人しらず

二〇四

なでしこの花ちり方になりけり我待秋ぞちかくなるらし

○一首の意かくれたる所なし。万葉十に、「野べ見ればなでしこのはな咲にけり我まつ秋は近づくらしも、とあるにもはら同じ。何事とはしられざれど、秋を待べきゆゑこそありけめ。又思ふに、もしは、秋の司召などを待人の歌にてもあらんか。

二〇五

よひなみがらひるにもあらなん夏なれば待くらすまのほどなかるきべく異

○此歌いと心得難し。奥義抄には、夜も日も、皆ながらひるにてあれかし、よるひるといふわきまへなくは、暮をまつといふ事もなくて、人にあはんと思ふに、日の暮がたきなげきもあらじとよむにや、とあ

(三十)れども、かくては結句にもかなはぬさまに聞え、初句の、ながらといふ詞の意もたがへるやうなり。ながらといふ言を、俗には、なれどもといふやうの意は下押へハカリナガコは、に遣へども、雅言なるは然らず。すべて、某ながらは、某のまゝにてといはんが如し。古今夏「夏の夜はまだよひながら明ぬるを云々は、宵のまゝにて明ぬるをなり。又、詔詞などに、天皇のおもほしめす事を、神ながらおもほしめさくなど云詞、数多くありて、皆、天皇は即頭神アトツカにて大まします、其頭神に大ましまして、云々おもほしめすといふ意なり。万葉の長歌などにも多くある詞なりかかれば此詞は、皆、云々にて、云々のまゝにて、といふ意なり。詔詞、万葉などに、而、また隨などの字を書たるにてもしるべし。されど所によりては、俗に遣ふ意といと近く、まぎらはしきもあるより、混れたる三十もの見えたり。古今上の詞書に、日はてりながら、雪の頭にふりかかりけるを、とあるなども、日は照るまゝにて、雪の云々といふことなれども、よくせざれば、俗に遣ふ意日は照れども、と云意のやうにも思はるゝなり。かくざまなるも多くあるより、心得違へる事もあるなり。かゝれば、此よひながら云々も、よひのまゝにてといふ意にて、此短夜の其まゝにてといふ事なるべし。一首の意は、夏は短夜なるが、此短き夜が、即とりも直さず、此まゝにて昼にてあれかし。夏は日の長くて、明日の夜を待くらす間が長きを、明日の長き日一日待くらす間の長くなきやうに、と云意にもあらんかと思はるゝなり。

よひとは、宵暁の宵をいふにはあらず。夜の事をいへるにて、ひるとは、明日一日の事をいへるなるべし。さてかく見る時は、明日の(三十一)夜逢はんと契おきたる人の許などに、よみてやりたるにもあらんか。されど、たしかには心得がたければ、猶よく考ふべきなり。

二〇六

夏の夜の月はほどなく明ぬれどあしたのまをぞかこちよせつる
は異

○此歌もいと心得がたし。ながら奥義抄には、月見るほどもなく明ぬれば、朝の間、日の出ぬほどを、夜と思ひ

ける 奥風集

なして月を見るなり、かこつとは、夜とおしていひなす意なりとあれども、穩にも思はれず。師翁云、夏の夜はほどなく明るなれど、夏の夜の月が朝まで残てあれば、夜へ翌朝のまを統足して、月が、朝を夜へかこちよせたるよといふなるべしといはれたり。かこちは、かこつけにて、兼慶集に、「白雪のふる年ながら庭の梅花とかこちてにひひやはせぬ、とあるなどにて、此歌のかこちよすといふをも心得べし。三十一〇

二〇七

かさゝぎの峰とびこえてなきゆけば夏の夜わたる月ぞかくるゝ

○抄には、鶺鴒名、鳥鶺鴒准、遊仙窟にはやもめがらすとよみ、源氏浮舟には、鶺鴒をかさゝぎとよめり。

此歌は、魏武帝の短歌行に、月明カニ星稀チ鳥鶺鴒ニ飛フ、此心の由、童蒙抄にあり。夜明てかさゝぎの岑

こゆるに、夏の月の入かくれたるさまなり。夜わたるは、夜ゆくさまなり云々と見えたり。今思ふに、此

歌六帖一夏月の題、同六かさゝぎの題二所に出是等は別により所もなけれど、菅家万葉集下にも、此集の如くありて、さて、鶺鴒飛度嶺無

レ留ルト云々、といふ詩を添へられ、夫木廿には、鶺鴒飛マ山月曙千里「かさゝぎの嶺とびこえてなきゆけばみ

山かくるゝ月かとぞ見る、とあるなどによれば、かさゝぎを、即チ月と見なしたるおもふぎなり。然れば

此鳥は白き鳥にて、夜飛ぶ形の、月とも見ゆばかりに、白く光あるなる三十二べし。菅家万葉の詩に、

鶺鴒ともあり。又夫木の歌の下句などのさま、きはめてしか聞ゆるなり。漢国の鶺鴒といふ物は、色黒き

鳥のよしなれども、こゝにてかさゝぎといふは、鳥カキなどの類にはあらざるべし。浮舟卷にも、洲さきに

たてるかさゝぎも云々とあれば、いづれにしても鶺鴒の中の一種と聞ゆるなり。よりて、此集の歌をも、夫

三〇六

木などの歌に引合せて、夏、夜、かさゝぎの岑を飛越て鳴行く形の、白く光あるを見て、うちつけに、短夜の月の、山端に隠るゝよと思ふ、といふ意と見ん方、然るべきなり。夏の夜わたるといへるは、短き夜なれば、月の行、ことの早ければなり。かくてかさゝぎの事、又漢国にて鶴といふ物のことなど、いと委き説あれども、事長ければ別記に出せり。委くはかしこを見て心得べし。(三十二)

秋近み夏はてゆけばほとゝぎすなくこゑかたきこゝちこそすれ

○意明らかなり。万葉八「時鳥声きく小野の秋風に萩咲ぬれやこゑのともしき、とあるにやゝ近し。

かつらのみこの、はたるをとらへてといひ侍れば、わらはの、かざみの袖につゝみて

○此詞書、いさゝかたしかならぬさまなり。大和物語には、桂のみに、式部卿、宮すみ給ひける時、其宮にさぶらひけるうなぬなん、此男宮をいとめでたしと思ひかけ奉けるをも、えしり給はざりけり。螢のとびありきけるを、かれとらへてと、此わらはにのたまはせければ、かざみの袖に螢をとらへてつゝみて、御らんぜさすとて聞えさせける「つゝめども云々、と(三十三)見えたり。うなぬは

三〇七

つゝめどもかくれぬものはなつむしの身よりあまれる思ひなりけり

○螢の事を、云々なる物よなど、我心にくらべて、深く感じたる意にいひて、さて、我も此如くにて侍と

長し。飾抄に委く見えたり。
童女をいふ。万葉十六に、「橘の寺の長屋でわがるおし童女(のナギ)はな
りは髪あげつらんか。和名抄にも、髻髪、宇奈為(ウナキ)と見えたり。
桂のみこは、寛平ノ帝の皇女におはしまして、
乎子内親王と申奉れり。かざみは、汗衫と書て、童女のきる物なり。縫さまは、狩衣に似て尻いと

いふをふくめたるなり。師云、大和物語の文を引たるにて、此歌の意はいと明らかなり。されど、又思ふに、大和物語の文は、もしおもしろきさまにつくり書なしたる物ならば、たゞ此後撰集の詞書のまゝにて、桂宮にさぶらふわらはの、主(三十三)人のたまふまゝに、螢をとりて、さて螢を題詠の如くによみたるにもあるべし。わらはの歌にては、さるふしもめづべきことなり。又、此わらは、心ある女ならば、主人桂のみこの、恋させ給ふ御方あるを、下に思ひふくめてよみて奉れるが、みこの御心にも、さぞかしと思し、感じ給ふゆゑなどもあらんをりの事にもあるべし。こはこゝろみにいふなりといはれたり。

題しらず

三〇 天川水まさるらし夏夜は流るゝ月のよどむまもなし

○夏の月の行く事の早きよしをいへるにて、かくれたる所なし。統後撰夏に、「夏の夜は水まさればや天川ながるゝ月の影もとどめず、とあるは全く同じ。(三十四オ)

月ごろわづらふ事ありて、まかりありきもせで、までこぬよしいひて、ふみのおくに

※つかね緒云、月ごろわづらふことありて、まかりありきもせで、藤原雅正が許に、えままでこぬよしをいひて、文のおおくに

○まかりありきは、出歩行イデツリキといふこと、までこぬは、行かぬと云事と聞ゆ。されど、人の許へ行かざる事を、までこぬといへるは、他に例もなきやうなれば、猶、雅正の来られずして、遠々よかくしき事といひやりたるか。までこぬといふ詞のうへにては、しか聞ゆれども、又歌の下、句にては、我が不ニカザル行事と聞ゆるなり。此詞書、家集には、六月つごもりに、まさたとのあそんにおくれる」との

みあり。

實之

三二

花もちりほとゝぎすさへいぬるまで君にもゆかずなりにけるかな(三十四ウ)

○春も過て、夏も末になるまで、君が許にもゆかずなりにける事かな。さて、遠々しき事よとなり。花も散といふに、春の過たる事、時鳥さへ往去るといふに、夏の果つる事をいへるなり。又、君にも云々といふにて、互に疎遠にて月日を過し、事をふくめたるなり。

返し

藤原雅正

三三

花鳥の色をも音をもいたづらにもうかる身はすぐすのみなり

○懶惰さつや身は、とかく花鳥の色音などをも、むなしく賞翫もせず、に過し侍るなりと云て、我も君も、互に然なりといふ意をふくめたるなり。此返歌は、かけ歌の上ノ句を花鳥の云々と
うけたるにはあれども、なほ詞の上にては、我身の事のみをいひて、さて意にては、彼方よりいひおこせたる意にこたへたるなり。ものうしとは、俗言に、タイゲナ、またブシーヤウナ、物クサ大鏡(三十五ウ)イなどいふに近し。後世に、憂ウき事と心得たるは誤なるよし、鈴屋、大入玉敷、いはれたり。末句のみは、俗言に、トカクと云に近し。

題しらず

よみ人しらず

三三

夏むしの身をたきすてゝたましあらば我とまねばん人目もる身ぞ

○夏虫飛の、火に入て身を失ひても、魂はなほ残てある物ならば、我も我が心として、それをまなびて、

身をば失はん。身だになければ、人目をつゝむ事もなくて、心やすきを、かく身のあるゆゑに、人目にかゝらんかと、それを守りなどもする事なれば、となるべし。たましあらばは、魂し有らばなり。四ノ句は、我も我が心としてといふ意なるべし。契沖法師は、我もの写誤にやといはれたれど、とにても聞えざるにはあらず。此歌伊勢集に出て、次に「よひのまに身をなげはつ(三十五)なるなつむしはきえてや人にあふときくらん、といふ歌あり。引合せて見るべきなり。

夏夜、月おもしろく侍けるに

三
四
こよひかくながむる袖の露けきは月の霜をや秋と見つらん

○此歌、僻按抄には、月照三平砂、夏夜霜といふ心をよめるなりとあれども、此朝歌の外にも、月影を霜と見たる詩などは、いと多く、又詩句によらでも、かくざまにはいふべき事なり。一首の意は、今夜かく月を眺居る袖の、何となく感情に堪えずして濡るゝは、月影の、真白におきわたしたる霜の如くなるを、秋と見たるにやあらん。秋は露しげき時にて、袖のぬるべき事なれば、といふなるべし。

みな月、はらへしに川原にまかり出て、月のあかきを見て(三十六)

○六月の大祓は、晦日なる事は論なし。されど、此歌によりて、契沖法師も、かぎりある公事こそつごもりにはすなれ、わたくしの家にては、便ある日にするなるべしといはれ、為家卿抄にも、

爰は晦日に限らず、六月中に便宜ある時祓しけるなり、家説なりと見えたり。正明云、世上に夏祓を卅日の事と心得たるは誤なり。夏ばらへは、夏の間いつにても有るべき事にていはゞ卯月などに

すべき事なるを、懈怠オシゴトはて、六月晦日に及ぶなり。六月晦日は大祓にて、朱雀門の前にて其義ある事なりといはれたり。此説の如くなれば、大祓と夏祓とはもとより別にて、夏祓はいつといふさだまりはなき事なれば、此事は猶よく考へて、追考にいふべし。晦日の大祓の事、此歌にはあづからず。(三十六) 然らば此詞書をも、みな月」とよみ切て、祓しに云々と心得べきなり。

三五

かも川の水底すみて照る月をゆきて見んとや夏ばらへする

○行て見んとやは、来て見んとやといふ意なり。ゆく行をくと来といひ、来来を行くと、互に通はせていふ事、多く例あり。万葉一に、「大和には鳴てか来らんよぶこ鳥きさの中山よびぞこゆなる、とあるなども、鳴てか行らんといふ意に見てよろし。されど、しか通はせいふも、さるべきゆある所の事なり。来といふべきを、みだりにゆくといふやうの事にはあらず。此万葉の歌にては、即大和の方に居る人の心にて、来らんとはいへるなり。又此集のにては、いまだ川原に出ずして、家に在るほどの心にて、行て云々とはいへり。かくて一首の意は、加茂川に祓に出たるに、水にうつりて、底もさやけくする月の、すよしくおもしろきを見て、さては人々の夏祓しにとて川原に出るは、かく清き月を見んととの事なるべしといふなり。(三十七)

三六

たなばたは天の川原をなまかへり後のみそかをみそぎにはせよ

みな月ふたつありけるとし

七目を、六帖と異

○鈴屋スズヤ大人云、詩、小雅大東篇云、維天有漢、フツツガハ監亦有光、サシクニ跂ツル彼織女、終日七襄ナナセツカと有て、傳曰、襄ムス反也とあり。これ意は大に異なれども、なまかへりと云詞は似たる事なり。さて七かへりとは、七度の祓の事なり。後一条、院の御時に、七度の祓ありし事、野府記に見えたりといはれたり。此説によりて、師翁の考二義あり。云、此歌は閏六月ある年の、初の六月晦日に、川原に出て祓を行ふを見て

よめるなり。但、閏月ある年の六月祓は、初の六月に行ふ事か、後の六月に行ふ事か、今夜初の六月みそぎを行ふ人々よ、織女は天漢を七かへりすといふ本文もあれば、初の晦日にせずと、立かへり、後の晦日を見そぎには用ひよ、とよ(三十七七)めるなり。此説にては、七度の祓の事、こゝに入用なし。たゞ天の川原を七かへりと云本文を趣向にせるのみなり。又一説は、織女は天漢を七度かへるといふ本文を以て、織女へよみかけたる歌なり。そはまづ、織女は、七月七日の夕に天の川原へ出るものなり。さて七夕の祭には、すべて七の数を揃へて祭る事もあり。又みそぎに七度の祓といふ事もあり。又川原へ出て行ふ事にもあり。七夕にもほど近き比のしわざにてもあれば、此さまぐの縁ある事どもをとり合せてよみなしたるなり。一首の意は、今この川原へ出て、人々はみそぎをするが、今年に閏六月のある事なれば、七月七日まで、やゝ日数のほどある事なれば、たなばた姫は、みそぎをするならば、後の六月の三十日を、みそぎには用ひよといふなりといはれたり。かくて(三十八七)、閏月ある年の六月祓は、まづは閏月に行はるゝ事とおぼしくて、西宮記六月の条に、大祓、延喜元年閏六月晦日、有大祓と見え、やゝ後の書にはあれども、東鑑の文曆二年乙未六月の条にも、卅日辛卯、来月依レ為_ル閏月、今夜可_レ被_レ行、六月祓_ヲ哉否_ノ事、為_テ藤内判官定員奉行、一被_レ尋_ニ問、有職并陰陽道_ノ輩_ニ、河内、入道等申_テ云_ク、如_キ義解_ノ文_ノ者、可_レ行_ヲ于閏月_ニ事分明也。和歌ニ云、ノチノミソカラミソカトハセヨ。然者其上治承四年、建久八年、建保四年、皆被_レ行_ヲ于閏月_ニ云々、諸人一_ニ同之_ニ、資俊申_テ云、両月行_レ之例存_之云々、而_レ就_テ三分_ノ義_ニ不_レ被_レ行_ハ云々。と見えたり。此東鑑のみそかを三十日とはせよとある、は、かく佐へ懸たるなるべし。なほ此歌の事、己も聊考へたる事もあれど、いまだよくも思ひ定めざれば、猶よく考へて追考に記すべし。